

## 2017年に宮崎県大淀川水系で確認されたオヤニラミ属魚類に関する追補

日比野友亮<sup>1</sup>・田口智也<sup>2</sup>・国松翔太<sup>3</sup>

## Author &amp; Article Info

<sup>1</sup> 北九州市立自然史・歴史博物館（北九州市）  
yusukeology@gmail.com (corresponding author)<sup>2</sup> 宮崎県水産試験場内水面支場（小林市）<sup>3</sup>（長崎市）

Received 30 July 2024

Revised 06 August 2024

Accepted 07 August 2024

Published 10 August 2024

DOI 10.34583/ichthy.47.0\_21

Yusuke Hibino, Tomoya Taguchi and Shota Kunimatsu. 2024. A supplementary report on an additional species of the genus *Coreoperca* confirmed in the Oyodo River system, Miyazaki Prefecture in 2017. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 47: 21–25.

## Abstract

In December 2017, a single individual of the genus *Coreoperca* was collected from the Oyodo River system in Miyazaki Prefecture, southern Japan. Based on photographic evidence, it was determined that the individual is different from both *Coreoperca kawamebari* and *Coreoperca herzi* which have already been recorded from the river system as introduced species. Although the individual was not preserved as a specimen, it was identified as *C. whiteheadi* due to its deep body and wide interorbital area based on the photographs. It represents the first introduced record of the species in Japan. Consequently, the number of introduced species of the genus *Coreoperca* confirmed from the Oyodo River system in Miyazaki Prefecture is at least three. A new standard Japanese name “Nan-etsu-oyanirami” is proposed for the species, based on a specimen collected from Guangxi, China.

オヤニラミ属 *Coreoperca* Herzenstein, 1896 は東アジアに分布する一群で、日本、朝鮮半島、中国およびベトナムから全4有効種が知られている（日比野ほか, 2019; Guan et al., 2022）。このうち日本国内に自然分布する種はオヤニラミ *Coreoperca kawamebari* (Temminck and Schlegel, 1843)のみであるが、2017年には朝鮮半島に分布するコウライオヤニラミ *Coreoperca herzi* Herzenstein, 1896 が日本国内自然下ではじめて確認され、その後は再生産を繰り返して分布範囲を着実に拡大させている（Tsuji et al., 2024）。オヤニラミについても国内外来種としての確認が相次いでおり、九州南部（日比野ほか, 2019）をはじめとして関東以南

の日本各地から確認されている（藤田, 2019; 太下ほか, 2023; 太下・伊藤, 2023）。

九州南部を流れる大淀川水系におけるオヤニラミとコウライオヤニラミの侵入状況については侵入初期の時点で日比野ほか（2019）により詳報された。これらの2種がはじめて確認された2017年の生物調査の過程において、この2種のいずれとも異なる形態的特徴をもつオヤニラミ属魚類が別途1個体採集されていたものの、その具体的な情報については未公表であった。この1個体については標本化されず写真資料しか残されていないが、外来種の野外放流の実態を示す資料として、写真から確認可能な形態的特徴から種同定を試みた結果、日本国内ではこれまでに確認例のなかった *Coreoperca whiteheadi* Boulenger, 1900 に同定された。本稿ではこの確認について報告するとともに、過去 *C. whiteheadi* に対して使用されてきた和名の検討を行ったうえで、本種の自然分布域から得られた標本に基づいて標準和名を提唱する。

## 材料と方法

鰭条数の計数および標準体長（以下、体長）、体高の計測を含む形態的な調査はすべて3点の写真資料に基づいて行った。使用した写真についてはすべて神奈川県立生命の星・地球博物館の魚類画像資料データベース（KPM-NR）に登録した。データベース上では6桁の数字の直前に0を付加した番号で表示される。標準和名提唱に用いた基準標本は北九州市立自然史・歴史博物館（KMNH VR）に保管されている。

*Coreoperca whiteheadi* Boulenger, 1900

(Figs. 1, 2)

**写真資料** KPM-NR 254001-A, 254001-B, 254001-C, 大淀川水系萩原川 (31°42'11.8"N, 131°04'58.4"E), 2017年12月6日, 田口智也撮影。

**写真資料に基づく種同定** 本写真個体は前鰓蓋骨に棘をもたないことから *Siniperca* Gill, 1862 ではなく、オヤ

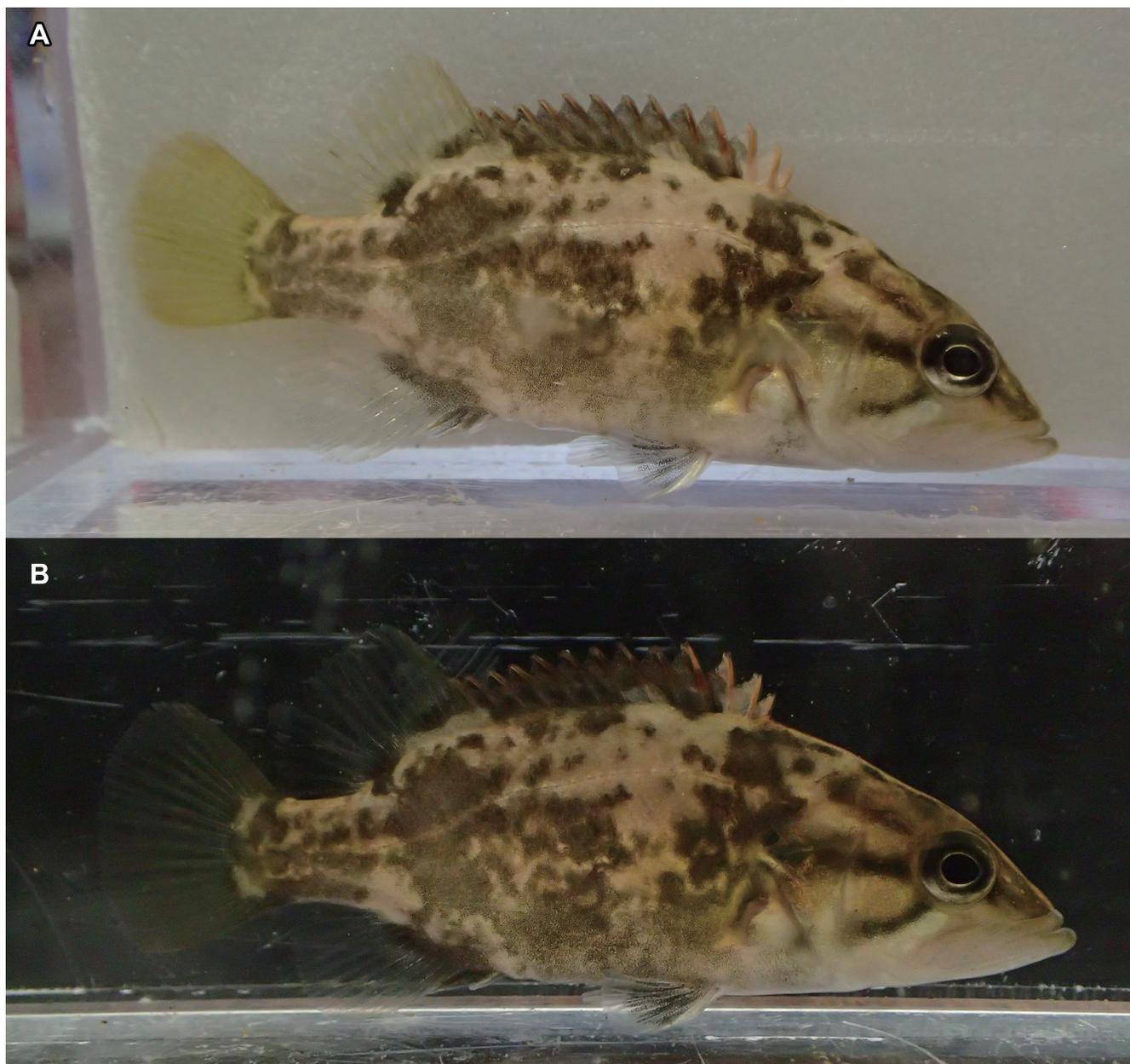


Fig. 1. Lateral view from right side of *Coreoperca whiteheadi*, Hagiwara River, Oyodo River system. A, KPM-NR 254001-A, white background; B, KPM-NR 254001-B, black background.

ニラミ属に含まれる (Fig. 1A, B) (Yabumoto and Uyeno, 2000). 背鰭条数が XIII, 14, 臀鰭条数が III, 11, 腹鰭条数(右側)が I, 5 で, この特徴は 4 有効種のうちオヤニラミともコウライオヤニラミとも合致せず, *Coreoperca liui* Cao and Liang, 2013 と *Coreoperca whiteheadi* Boulenger, 1900 に一致する. これら両種は体高と眼隔幅の体長 (標準体長と推測される) に対する比率の差異によって識別される (Cao and Liang, 2013). Cao and Liang (2013) には標準体長の測定方法が示されていないが, ほぼ側面方向から撮影された写真 (Fig. 1B) に基づいて体長に対する体高の比率を算出すると, 上唇を含めた場合には 34.4%, 含めない場合には 34.7% となり, いずれの値についても *C. whiteheadi* の範疇 (33.5–39.1%) に含まれる. 本写真個体について残されている写真から Cao and Liang (2013) が求めたような体長

に対する体高の比率を正確に推定することは困難であったが, 頭部背面の写真 (Fig. 2) から, 本撮影個体の眼隔幅は広く, 眼径と同程度であることが判明した. *Coreoperca liui* の体長に対する眼隔幅の比率は 4.6–5.6% (平均値 5.2), 眼径は 6.8–9.8% (平均値 8.1) である一方, *C. whiteheadi* では眼隔幅の比率は 6.6–8.5% (平均値 7.3), 眼径は 5.9–9.5% (平均値 7.2) と, 眼隔幅と眼径が概ね同長程度である (Cao and Liang, 2013). したがって, 本写真個体を *C. whiteheadi* に同定した.

**備考** *Coreoperca whiteheadi* の自然分布域は海南島を含む中国南部からベトナム北部にかけての地域であり (Cao and Liang, 2013; Guan et al., 2022), これまでに日本国内の自然水域で確認された事例は存在しない. したがって, 本研究における写真個体の確認は *C. whiteheadi* の日本国内



Fig. 2. Anterodorsal view of *Coreoperca whiteheadi*, KPM-NR 254001-C, Hagiwara River, Oyodo River system.

における初記録であるとともに、国外外来種としての初確認である。ただし、後述するように現状では2017年の採集以前、および採集以降の多回の採集努力にもかかわらず、本種の追加個体は採集されていない。

萩原川では2017年に宮崎県内水面漁業協同組合連合会が主体となって、宮崎県水産試験場内水面支場、宮崎県内水面振興センター、および宮崎市大淀川学習館との共同で、ほとんど生物採集を伴っていない予備調査を除くと計3回の生物調査が計3地点で実施されている。5月30日に行われた第1回調査では大淀川との合流点に近い調査地点でコウライオヤニラミが1個体採集され、8月23日に行われた第2回調査では中流部でコウライオヤニラミとオヤニラミが各1個体採集された。日比野ほか(2019)では言及されなかったが、12月6日に行われた第3回調査ではこれら2種は採集されず、*C. whiteheadi* (当時未同定)が新たに採集された。なお、調査各回の所要時間は1地点あたり1から1.5時間、調査者数は6から8名で、たも網、電気刺激採集器、投網が併用された。

萩原川を含めた都城盆地の河川ではオオヨドシマドジョウ *Cobitis sakahoko* Nakajima and Suzawa, 2016 に関連した生物調査や、アマチュアの愛好家による散発的な採集活動が、少なくとも2010年代には毎年行われてきた(例

えば、渡辺, 2012)。大淀川水系では1996年度以降、河川水辺の国勢調査によって、数年に一度の頻度で春から秋に生物調査が実施されている。この調査地点に萩原川自体は含まれてはいないが、都城市内には複数の調査地点が設定され、大淀川本流に萩原川が合流する直下の1地点(歌舞伎橋)が含まれている。2017年に採集されたオヤニラミ属の3種の体長はさまざまであったが、コウライオヤニラミについては明らかに当歳魚と思われる仔稚魚ないしは未成魚が確認され始めたのは2018年である(日比野ほか, 2019; 古橋龍星氏, 私信)。このような状況を踏まえると、2017年頃の同時期にオヤニラミ属の複数種が相次いで放流されたと推測するのが妥当である。コウライオヤニラミが国内に定着する以前から、オヤニラミ属の種は国内に分布するオヤニラミだけではなく、複数の種が鑑賞用として流通している。現状では大淀川水系においてオヤニラミとコウライオヤニラミ以外のオヤニラミ属の定着は確認されておらず、2017年以降に行われた河川水辺の国勢調査や、著者らによる採集調査、および環境DNAによる定量メタバーコーディングでも捕捉されていない(国土交通省, 2024; Tsuji et al., 2024)。ただし、このような調査は必ずしも水系全体を網羅していないため、現在も新たな外来種の侵入および定着に注意を要する状況にある。

***Coreoperca whiteheadi* の標準和名** 本来日本国内に産しない *C. whiteheadi* にはこれまでに複数の和名が使用されており、文献上で使用されたものに限定しても、本種のタイプ産地に因んだものと思われるハイナンオヤニラミ(平坂, 1942)やカインオヤニラミ[初出は原田(1943)]、分布域に由来するナンシオヤニラミ[初出は森(1947)]、中国での流通名白头鰻を直訳的にカナ表記したものと思われるハクトケツギョ(渡辺, 1997)、およびチュウゴクオヤニラミ(白井ほか, 2003)と統一されていない(Fig. 3)。一方で、本種はこれまでに日本国内での分布が確認されなかったために標準和名の起点となった中坊(2000)には掲載されておらず、その後も標準和名であることを明示した特定の和名の使用例は存在しない。したがって、現状で本種に標準和名は存在しない。

*Coreoperca whiteheadi* は日本国内で鑑賞魚として流通しているが、その流通名(商品名)についてもやはり統一されていないうえ、例えばチュウゴクオヤニラミ(中国オヤニラミとも)は *C. whiteheadi* ではなく *C. liui* を指して使用されることもある。そもそも、*C. liui* は従来 *C. whiteheadi* の北部集団とされてきたものが別種として記載されたという経緯をもつ種であり、*C. liui* 記載後に定義された *C. whiteheadi* に対して新たに文献上で造語された和名はない。今後、国内の野外で発見される際に混乱を生じさせないため、*C. whiteheadi* の自然分布域内である中国広西チワン族自治区産の標本(KMNH VR 100117, Fig. 4)を基準標

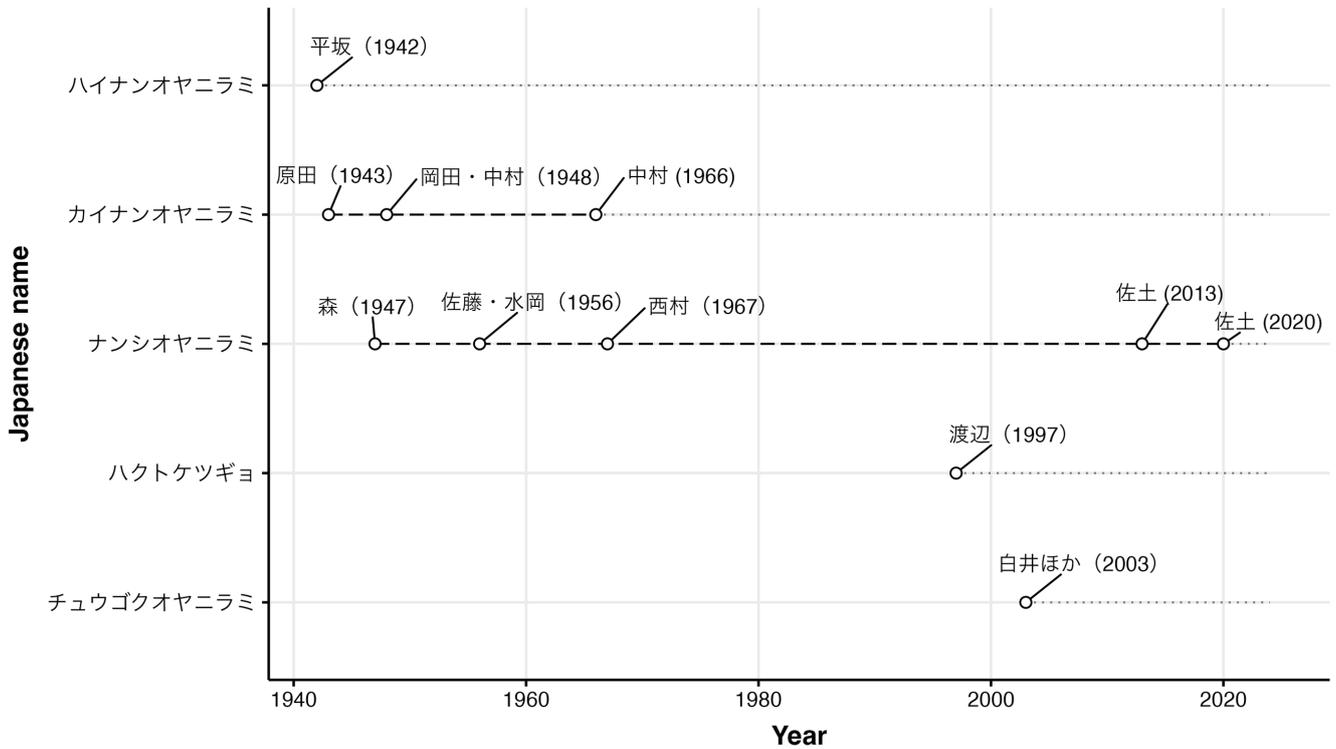


Fig. 3. History of the Japanese names of *Coreoperca whiteheadi* in literature.



Fig. 4. Preserved specimen of *Coreoperca whiteheadi*, KMNH VR 100117, 79.2 mm of standard length, collected from Guangxi, southern China.

本に指定し、本種の標準和名として新たにナンエツオヤニラミを提唱する。なお、標準和名の命名は自然科学、教育、法律、行政等において分類学的単位を特定することを目的としており、通用されている商品名等の使用を妨げるものではない（日本魚類学会，2020）。

これまでに文献上で使用された和名のうち、もっとも使用頻度の高かったものはナンシオヤニラミであったが、佐土（2013, 2020）による使用例を除けばその使用は1960年代以前に偏っており、使用頻度の差は他の和名と僅差で、慣用されていると言えるほどではない。魚類の標準和名の命名ガイドライン4.4（日本魚類学会，2020）を重

視した上で、今後の分類学的地位の変更に伴う混乱を最小限に留める観点から、これまでに文献上で使用された和名の使用を避けた。新標準和名のナンエツオヤニラミは、*C. whiteheadi* の分布域がかつて存在した南越国の支配地域（間接統治地域を含む）と概ね一致することに因む（川手，2016）。

**標準和名の基準標本** KMNH VR 100117, 体長 79.2 mm, 中国広西チワン族自治区。

#### 謝 辞

本研究を行うにあたり、古橋龍星氏（鹿児島大学）に

は文献を提供いただくとともに、コウライオヤニラミの出現状況についてたびたび情報の提供を受けた。和田英敏氏（神奈川県立生命の星・地球博物館）には写真資料の登録に際し労をとっていただいた。瀬能 宏氏（神奈川県立生命の星・地球博物館）と本村浩之氏（鹿児島大学）（いずれも日本魚類学会標準和名検討委員）には標準和名についての助言を受けた。渡辺勝敏氏と辻 冨月氏（京都大学）には本稿の取りまとめを勧めていただいた。この場を借りて御礼申し上げる。

## 引用文献

- Cao, L. and X.-F. Liang. 2013. A new freshwater perch species of the genus *Coreoperca* Herzenstein (Perciformes, Serranidae, Sinopercinae) from Zhejiang Province, China. *Acta Zootaxonomica Sinica*, 38: 891–894.
- 藤田朝彦. 2019. オヤニラミ, pp. 346–347. 細谷和海(編)山溪ハンディ図鑑 15 増補改訂日本の淡水魚. 山と溪谷社, 東京.
- Guan, F., Q. Sheng, Y. Zhang, H. Lv and Y. Wang. 2022. The complete mitochondrial genome of a vulnerable mandarin fish *Coreoperca liui* (Teleostei: Perciformes: Serranidae) from Qiandaohu Lake in China. *Mitochondrial DNA Part B Resources*, 7: 1075–1077.
- 原田五十吉. 1943. 海南島淡水魚類譜. 海南海軍特務部政務局, 海南. 114 pp.
- 平坂恭介. 1942. 海南島の動物概観, pp. 5–12. 臺北帝国大学理農学部(編)臺北帝国大学 第1回海南島學術調査報告. 臺灣総督府外事部, 臺北.
- 日比野友亮・田口智也・岩田一夫・古橋龍星. 2019. 宮崎県大淀川水系から得られたコウライオヤニラミ. *Nature of Kagoshima*, 45: 243–248. [URL](#)
- 川手翔生. 2016. 南越の統治体制と漢代の珠崖郡放棄. *史観*, 174: 45–61.
- 国土交通省. 2024. 河川環境データベース. [URL](#) (2024年7月2日)
- 森 為三. 1947. なんしおやにらみ, p. 429. 内田清之助(編)改訂増補日本動物図鑑. 北隆館, 東京.
- 中坊徹次(編). 2000. 日本産魚類検索 全種の同定. 第2版. 東海大学出版会, 東京. lvi + 1748 pp.
- 中村守純. 1966. <日本の淡水魚> オヤニラミ. *フィッシュマガジン*, 2 (3): 88–89.
- 日本魚類学会. 2020. 魚類の標準和名の命名ガイドライン. [URL](#) (2024年7月2日)
- 西村三郎. 1967. ケツギョ類の起源と分化. *Bulletin of the Osaka Museum of Natural History*, 20: 13–30.
- 岡田彌一郎・中村守純. 1948. 日本の淡水魚類. 日本出版, 大阪. 220 pp.
- 太下 蓮・藤田宗也・伊藤 玄. 2023. 滋賀県宇曾川水系における国内外来種オヤニラミ(スズキ目ケツギョ科)の初確認. *伊豆沼・内沼研究報告*, 17: 39–46. [URL](#)
- 太下 蓮・伊藤 玄. 2023. 三重県における国内外来種オヤニラミ(*Coreoperca kawamebari*)の初記録. *伊豆沼・内沼研究報告*, 17: 29–37. [URL](#)
- 佐土哲也. 2013. 渋魚・珍魚探訪! 温帯域の魚たち. *フィッシュマガジン*, 33 (4): 147.
- 佐土哲也. 2020. 世界 温帯域の淡水魚図鑑. 緑書房, 東京. 392 pp.
- 佐藤月二・水岡繁登. 1956. オヤニラミの採集と飼育. *採集と飼育*, 18 (5): 135–139.
- 白井 滋・藪本美孝・金 益秀・張 春光. 2003. *Cytochrome b* 遺伝子からみたオヤニラミ及びその近縁種の系統(予察). 北九州市立自然史・歴史博物館研究報告 A 類(自然史), 1: 45–49. [URL](#)
- Tsuji, S., H. Doi, Y. Hibino, N. Shibata and K. Watanabe. 2024. Rapid assessment of invasion front and biological impact of the invasive fish *Coreoperca herzi* using quantitative eDNA metabarcoding. *Biological Invasions*, doi.org/10.1007/s10530-024-03364-9 (June 2024).
- 渡辺昌和. 1997. 世界の温帯性淡水魚③ ハクトケツギョ. *フィッシュマガジン*, 33 (4): 205.
- 渡辺昌和. 2012. 日本水風景巡り 淡水魚を求めて 宮崎大淀川川辺を巡る. *フィッシュマガジン*, 48 (6): 82–85.
- Yabumoto, Y. and T. Uyeno. 2000. *Inabaperca taniurai*, a new genus and species of Miocene percoid fish from Tottori Prefecture, Japan. *Bulletin of the National Science Museum, Series C*, 26: 93–106.